

「ひあぁッ♡♡！！！」

男は隣の男と同じように、赤ん坊のように胸に吸い付いてきた。

ちゅうっと吸われ、また躰がビクンッ<sup>しな</sup>と撓るほどの刺激が駆け下りる。そうなると腰が仰け<sup>そ</sup>反って、啞えられたままの幼茎を、足元の男に向かって突き出すような形になってしまう。

「あぁあ”あッ♡♡♡♡」

それに応えるように、じゅっと竿を吸い上げられた。

あまりに強烈な快感に、一瞬気が遠のく。

続けて硬くなった竿を、れろれろと味わうように舐めとられる。

なにこれ——なに…これ——……

両乳首と竿とを同時に吸われ舐められ、どこにどう集中したらよいのかわからない。どの場所からも絶え間なく刺激を送り込まれ、抑えようとしてもびくびくと躰が跳ねてしまう。

霞みがかった頭のまま、ふと鏡が目に入る。

蝶の死骸に幾多の虫がむらがっているような光景がそこにあった。

少年が身を躍らせるたび、垂れ下がった<sup>すそ</sup>裾とも<sup>たもと</sup>袂ともつかない布がひらめいて

いて、そんな比喻が浮かんだのかもしれない。

鏡の中の光景に生理的な嫌悪を覚えると同時に、それを上回る何かを感じるのは気のせいだろうか。

「ああ…っ…♡あああ…っっ♡、♡」

鏡の中の少年が、熱に浮かされた表情で喘いでいる。

あんなの自分じゃない、自分なわけない——

見るたびに羞恥を煽られる鏡の中の自分から、なぜか目が離せない。

「…っ！？ああ…ッ…っ、♡♡」

身を跳ねさせるたびに引き締めてしまう後孔。

ますます強くなる孔内のびりつきが、乳首や竿からの刺激と妙な繋がりを持ち始めている。

これ以上、この棒を締め付けてはいけない——

直感的にそう思うのだが、敏感になった胸と竿とを思い思いに<sup>なぶ</sup>舐られていると、どうしても腰が跳ねて孔を引き締めてしまう。

「んう…っ♡、あああ…♡♡ああ……っ♡」

孔内の肉襞が、奇妙に蠢<sup>うごめ</sup>いている。

そのたびに、蓮芋の茎がみちみちと寄り合わされてできた独特の凹凸<sup>おうとつ</sup>をなかで感じてしまう。

棒ずいきの存在をまざまざと感じさせられるごとに、鏡の中の少年の表情<sup>かお</sup>はとろけていく。

違う、あんなのは自分じゃ——……

「ああツツ！、」

唐突に棒ずいきを抜き取られる。

加減もなくずぽっと抜かれ、なかを勢いよく擦られた驚きにまた腰が跳ねてしまった。

「本当に、今年の贅は素質があるなあ？」

棒を抜き取った背後の男が言う。

躰の前側は三人の男たちに責められ続けているから、四人目が加わったことになる。

「お清めも慣らしも済んだし、もうお供えの段階に入ってもいいよなあ？」

「ひ…っ！、」

歳若い男の声に肩口で囁かれ、棒を抜かれたばかりの孔に触れられる。

「…ッ！……うそ……、いや……、」

それは指でも棒ずいきでもなかった。

ぬち、と小さな水音が響いて、熱い塊が押し込められる。

「い…っいやあ……！！！！」

恐怖が頂点に達し、叫び立てる。

尻と太腿が勝手にがくがくと震えている。その震えを押しえつけ固定するかのよ

うに、背後の男は少年の腰骨をつかんでくる。

少年は木製の踏み台の上に乗せられているので、男たちとの腰の高さがぴったり

り合う。男は苦も無く、ゆっくりと腰を深めてきた。

「あ……っああ……いや…、いやあ……、…っ」

いざずぶずぶとそれに沈み込まれてくると、叫ぶどころではなかった。

指や棒ずいきでも大きいと感じたのに、それ以上に長大なものに貫かれている。

狭い孔をみりみりと拓<sup>ひら</sup>かれる感覚に、全身が栗立った。小刻みに軀を震わせながら、蚊の鳴くような声を漏らすことしかできない。

「かなり濡れてるね？棒ずいきのおかげかな」

そう言って後ろの男がふふ、と笑う。

「……あ……あ……、……、」

あまりの圧迫感に、息が詰まる。

凶器的に凶太いものを咥え込まされ、せめてしっかりと踏ん張りたいのにそれもできない。片足を吊られた体勢はひどく不安定で、下半身にまったく力を入れられない。男の手に掴まれた腰の位置だけがしっかりと固定され、軀の中で唯一の支点となっている。そこを猛<sup>たけ</sup>る肉杭でゆっくりと串刺しにされることほど、恐ろしいことはなかった。

凶太い幹のようなそれは、どくどくと少年とは異なる脈動を刻んでいた。まるで何か得体のしれない生物に、体内を蹂躪されているような気持ち悪さだ。けれど同時に——孔内を進まれるたび、どこか懐かしさに似た、切ない感覚を内壁が拾い上げはじめもいる。

「君のなか……、狭くて、…すごくいいね……」

吐息混じりに肩口で囁かれる。

そんなこと言われたって、不快なだけのはずなのに——

すごく大切な何かを褒められたときのように胸が疼くのは、どうしてなのだろう。

恐怖のせいではない、何の涙なのかわからない涙が込み上げていた。

「……や……やめ……、」

これ以上続けられたら、自分が自分でなくなってしまうようだ。

辺りの甘い匂いが濃くなっている。蔵を締めきっているから、香りが充満しているのだろうか。

少年が細い声で抗議するも、やはり男たちは聞き入れない。

胸や竿を弄られる快感と、襞を押し拵げられ挿入<sup>はい</sup>ってこられる圧迫感。それらが体内で奇妙に溶け合って、言い知れぬ焦燥にかられる。棒ずいきの残していったピリピリとした感覚も相まって、孔全体が熱っぽい。

「ああ…ッ、！」

最後は狭く深い場所に勢いをつけてねじ込まれた。

楔を打ち込まれた孔奥が、灼けるような鈍痛を訴える。

けれどそれで終わりではない。

「……っ……、…?!、」

奥深くに突きさされたまま両乳首をぬるぬると舐められ、熱い股間をじゅぽっ、じゅぽっ、と丁寧<sup>ていねい</sup>に吸われていると、孔奥の鈍痛がふいにうねりをあげはじめた。ざわり、と腰を中心に鳥肌が立つ。

痛みがじんじんとした痺れに変わったかと思うと、いつの間にかうずうずとした痒みのようなもどかしさに変化する。

「…あ……ああ……………、…、」

どくん、どくん、とうるさくなっていく脈動は、肉洞のなかの男のものだろうか、それとも自分のものなのだろうか。

圧迫感に乱れる息が、さらに熱を帯びていく。

少しも動きたくはなかった。少しでもなかで男のものと褌<sup>たかぶ</sup>とが擦れ合うと、昂<sup>たかぶ</sup>っている未知の感覚がさらに大きくなるような気がしたから。

けれど鼓動が高鳴り呼吸が乱れるなか、微動だにしないというのはなかなか困難なことだった。

それに――

「ああっ…いやあ……っ、…♡、」

乳首や幼茎を、まるで甘い菓子でも味わうように口に含まれ続け、また腰がびくびくと跳ねてしまう。なかの男をひくっひくっ、と内壁が締め付けてしまって、腹奥で奇妙なもどかしさがつのる。

同性の大人たちにこんなことをされているというのに、この脳を侵すような甘い香りのせいなのか——危機感も嫌悪感も、徐々に薄らいでいく自分が恐ろしくてならない。

「……気持ちよくなってるでしょ？」

少年の孔のひくつきを直接感じ取っている背後の男には、何もかもが筒抜けだった。耳元に<sup>かが</sup>屈まれあやすような口調で囁かれると、この行為をそこまで拒否しなくてもいいような気さえしてくる。

「ちよつとずつ、動くからね」

「…ッあああ……………！、」

男のものは大きすぎて、ずる、と引き抜かれる感覚につられて少年の腰も揺れ動く。孔内は尋常でない異物感に、完全に濡れきっていた。男が<sup>い</sup>入り口へゆっ

くり引き戻っていくぬるぬるとした感覚から、それが如実に伝わってくる。

「…あつ…あああ…つ…、…、」

<sup>そうにゆう</sup>挿入される時もつらかったが、抜かれるのは抜かれるので別のつらさがある。

一度こじ開けられて敏感になった場所を、再び隆々とした筋肉のような<sup>おうつ</sup>凹凸がこそげるように通過する。その感覚がぞくぞくとした痺れを背骨に伝えて、びくッびくッと大袈裟に腰を跳ねさせてしまう。

「躰……、<sup>い</sup>好い感じになってきたね」

再び背後の男に囁かれる。

屈辱でしかないはずの言葉が、とろりとした蜜のように耳に流れ込んでくる。

「…つあ……、」

最後に肉環を大きく雁首が拵げ、完全に幹が出ていく。

けれど一呼吸も間を置かず、

「ああッ…つ！？、」

再び男がゆっくりとそこを割り<sup>ひら</sup>拓く。

また同じ大きさに拵げられる入り口。

ぬちゅ、と先程よりも少し大きな水音が響いた。

「…あ……、だめ…、だめ……、……、」

躰が小刻みに震え続けている。

腹奥にわたかまるぞわぞわとした感覚を、これ以上刺激されてはならない。それだけははっきりとわかって、あまり孔内に意識が向かないよう先程から<sup>つと</sup>努めているのだが——男のものの存在感は凄まじかった。

二度目の<sup>そうにゅう</sup>挿入でも、やはり大きすぎると感じる。長大な形を改めて味わわされ、とろけかけた意識にまた恐怖が戻ってくる。

こんなものを、こんな狭い場所に<sup>いれ</sup>挿入ていいはずがなかった。

「……あ…、あ……………」

ゆっくりと奥へ<sup>はい</sup>挿入られて、また息が詰まりそうになる。

ぶるぶると勝手に下半身がわななく。

「あぁッ！、」